

Dec 1999



MRA ワールドニュース

世界の MRA - 最近の動き

■イギリス

The Clean Slate Campaign

オックスフォード市で 「心機一転週間」スタート



「心機一転キャンペーン」の発案者であるエドワード・ピーター氏(写真左)

イギリスのMRA専従者の発案により、西暦2000年という大きな節目の年を新しい精神で迎えるために、自分の間違いや変わるべき点を考え、少なくとも一つは正し、新しい希望につなげようという趣旨でキャンペーンが展開されています。イギリスの諸宗教の指導者や教育関係者等々を含む80名の署名者の支持のもと、各地の学校などでもその考え方が紹介されました。最近も文部大臣がこのキャンペーンを賞賛し、もっと多くの学校にこのキャンペーンの存在を知らしめる方策を考えるように関係部署に指示が出されました。

このキャンペーンの始まったオックスフォード市では、

市議会等の支持を得て、11月29日から「心機一転週間」を市長の発案で開催しました。市長は、このキャンペーンを『想像力に満ちたこれからの1000年を考えるための良いアイデアである。我々が今、何処にいるのか、そして我々のコミュニティと世界がどこに向かおうとしているのかを考えるためのチャンスである』と述べました。個人が変わる決心をしたこと、又、実際に行ったことの事例等がキャンペーンの主催者に多数寄せられています。

■主な内容■

◆ MRA ワールドニュース・1-2P

- ・「心機一転週間」スタート(イギリス)
- ・MRA シドニー会議開催(オーストラリア)
- ・マキノ島でMRAの展示会開催(アメリカ)

◆ 台湾大地震被災者への義捐金の御礼・3P

◆ 世界の MRA ホームページの紹介

◆ ジョティー姉妹による教育支援プロジェクト / ジョティー・スプラマニアン・4-5P

◆ カンボジアの子どもたちへ、感謝を夢と希望に託して / 兼松恵 ・6-7P

◆ 事務局便り他・8P

■オーストラリア

●12月3日～12月7日

シドニーでMRA主催の 国際会議開催。31ヶ国 から250名が参加



モエラ・イグアレックさん（左から2番目）と日本人参加者の皆さん（一番左が田中章博さん、そして、イグアレックさんを挟んでマリアンネ和田さん、瀬角善郎さん）

（報告者：マリアンネ和田）

先日、私はオーストラリアのシドニーで開催されたMRA主催の国際会議に参加しました。12月3日のオープニング夕食会に始まり7日に行われた閉会式までの5日間、とても充実したプログラムでした。会議では、朝4日間にわたり、仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教の礼拝がそれぞれ行われました。また様々なテーマに沿った会合や『ワークショップ』、そして『エンタテイメントの夕べ』の時間など毎日が盛りだくさんの内容でした。

今回私が参加したMRAシドニー国際会議は『希望を分かち合う』を総合テーマとし、『より良い社会の建設』『確信をもって実行』をサブテーマに話し合いが行われましたが、このテーマを達成するため、特に『癒し』『許し』『和解』『決断』について話し合いの焦点が絞られました。31ヶ国から集まった250名余りの参加者は、家族から社会にいたる様々な分裂、そして、国内外の民族間や宗教間における分裂など、様々な争いによって生じた傷を分かち合い、MRAの道徳的精神に助けられながら和解にいたるという過程を垣間みる感動的な経験を共有しました。その中でも最も感動的だったのは、パプアニューギニアから参加した、モエラ・イグアレックさんの日本人への謝罪でした。彼女は、私を含め3名の日本人に謝罪をしました。次にイグアレックさんの体験をご紹介します。

■癒しの旅の始まり

モエラ・イグアレック（パプアニューギニア出身）

私は1988年に、『21世紀の交流』プログラムの一環で、パプアニューギニアの公務員グループの一員として初めて日本を訪れました。私はこの日本への研修に来てすぐ、ある日本人と短い会話を交わしました。その時、私は叔父や母が、第二次世界大戦中に日本兵に酷いことをされていたという事実を怒りを込めて彼に話しました。私は日本を訪問する前に、家族からこうした話を幾度となく聞かされていたので、自分の日本人に対する気持ちは明確でした。

最初の日に出会った何の罪もない日本人に対して、私は

自分の家族が日本兵に酷いことをされたので日本人が憎いと言いました。その日本人は、私に許しを求めましたが、私は「許すかどうかは考えておく」と言ってその場を立ち去ってしまいました。

私はこの日本での滞在中、本当に素晴らしいもてなしを日本の方々から受けました。しかし、結局私は、その日本人に直接会って謝罪をする機会を見逃してしまいました。

この会議の間、その日本人が私にひざまずいて謝罪をする姿が自分の中で何度も蘇りました。そして、私は謝罪をしなくてはいけないという気持ちをより一層強く自分の中に感じました。ある晩、『文化の夕べ』の時間に、日本人の

女性が日本語の歌を歌いました。その時、私は再び謝罪をしなくてはいけないという焦りを強く感じました。私はこの謝罪という決断をディスカッション・グループの時間で分かち合いました。このグループの進行係の人は、この会議には日本人は一人ではなく、あと二人いるのだから、謝罪をしてはどうだろうかと私に勧めました。私は彼に勧められた通り日本人の方々に謝罪をしました。この時、初めて自分の心の中が軽くなりました。このように謝罪しなくてはならない相手が、私にはまだまだたくさんいます。これは私の癒しの旅の始まりなのです。

■アメリカ マキノ島でMRAの展示会開催

かつてMRAセンターがあり、様々なMRA主催の国際会議が開催されたアメリカのマキノ島で、この島でのMRAの歴史を示した展示会が開催されました。この展示会には、マキノ島のマーガレット・ドード市長を初め、MRA関係者等100名余りの人々が集いました。展示場の中心部には、MRAの創始者であるフランク・ブックマン博士に影響を受けた121名の人々の肖像画が3つの壁面にわけて飾られ、これまでの歴史を振り返りました。

■台湾大地震被災者への義捐金の御礼

この度の義捐金の協力への呼びかけに応え、個人・団体を合わせ111件、52万円のご寄付をお寄せいただきました。先に、送付した「世界の難民のためのチャリティ・コンサート」の収益金のなかからの10万円と、合わせ62万円を台湾のMRA協会に送金することができました。皆様の暖かいご協力に対し心から御礼申し上げます。尚、台湾のMRA協会からは次のようなメッセージが届いております。

親愛なる友人の皆様

まず、台湾MRA協会、並びに台湾MRA協会のメンバーを代表しまして、9月21日の台湾地震に寄せられました、皆様方のお心遣いと、災害の渦中にある私共の同胞に対する温かいご支援を賜りましたことに対し、衷心より厚く御礼を申し上げます。

私たちはその日、激しい地震で目覚めさせられました。廃墟と化した家々の前に立った私たちの眼には、脆い、しかし、真の人間性の一面が偽りのない姿で映りました。しかしながら、見る影もなく破壊された道路や街の向こうに、すべての社会の秩序がなお温かく輝いているように感じました。

ご支援頂いた金額と、MRAのメンバーが基本的に必要とする額にも配慮し、同時に救援資金を最も有効に活用するため慎重に考慮した結果、主として下記の2方法で使わせて頂くことに致しました。

1. 直接的な被害を受けたMRAメンバーへの支援 — 家屋が壊滅したメンバー10人に対する支援。そのうち6人の学生は特に、家族が困窮した状況下であり、日々の生計維持にも事欠いている状態です。
2. 各種の復興プロジェクトに従事している、各地のMRAのチームに対する支援。更に計画中のMRA会議、『私自身から始めるチエンジ』に参加を希望している被災者に信仰と自信を回復する一助として欲しいとの願いから参加費の補助をすること。

この度の地震が残した災害の実状は、本当に酷いものです。救援のため被災地におもむいた私たちも、被災者の困窮状況を憂慮しつつ被災地を去らざるを得ませんでした。私たちが、如何に彼等に同情の念を抱いても、最愛の家庭を失った人々の苦痛をすべて理解する事はできないと思います。

被災者の方々が、やがてはこの困難な状況を克服されるよう、衷心より願っています。ここに再度、皆様から賜った親身なご配慮に対し、厚く御礼を申し上げます。被災者の方々が破壊の中から再び立ち上がり、中国人の力と粘り強さを世界の人々に示せるであろうと私たちは固く信じています。

心からの感謝を込めて。

1999年11月15日

台湾MRA協会 会長 張 萬權
 事務局長 張 清江
 専従者 劉 仁州、蔡 貴珠

世界のMRAの情報が下記のアドレスでご覧になれます

■世界のMRA ホームページ

- スイス (英語、フランス語、ドイツ語)
<http://www.caux.ch/>
- オーストラリア (英語)
<http://www.mra.org.au/>
- カナダ (英語、フランス語)
<http://www.web.net/~mra/>
- デンマーク (デンマーク語)
<http://www.mra-dk.dk/>
- インド (英語)
<http://members.xoom.com/MRAIndia/>
- イギリス (英語)
<http://www.mra.org.uk/>
- 台湾 (中国語)
<http://www.mra-china.org/>
- オランダ (オランダ語)
<http://www.moreleherbewing.nl/>
- アメリカ (英語)
<http://www1.minn.net/~bandco/>

■MRAの関連プログラム(英語)

- 『コーMRA世界大会』
<http://www.caux.ch/>
- 『和解への鍵を求めて』
<http://www.caux.ch/afr/>
- 『産業人会議』
<http://www.caux.ch/industry/>
- 『国際コミュニケーションフォーラム』
<http://www.icforum.org/>
- 『自由への基盤』
<http://www.fffreedom.org/>
- 『都市への希望』
<http://hopeinthecities.org/Hope.htm>
- 『心機一転キャンペーン』
<http://www.cleanslate.org/>
- 『MRAスクール・プログラム』
http://www.mra.org.uk/general/mra_schools.html
- 『コー・スカラース・プログラム』
<http://members.aol.com/cauxsp/web/cspweb/htm>
- 『グローバル・ユース・ネットワーク』
<http://www.globalyouthnetwork.org/>

■書籍・ニュースレター

- 『コー・インフォメーション』 (英語)
<http://www.caux.ch/g/ci/ci-aktuell.html>
- 『フォー・ア・チエンジ』 (英語)
<http://www.mra.org.uk/fac/>
- 『シヨンジェ』 (フランス語)
<http://www.caux.ch/f/changer/aktuell.html>
- 『グローバル・エクスプレス』 (英語)
<http://www.mra.org.uk/globalex/>
- マイケル・ヘンダーソン (英語)
<http://fenet.net/henderson/>

■ Children Project

ジョティー姉妹による教育支援プロジェクト

ジョティー・スブラマニアン(インドMRA専従)

インドでは、貧困から児童労働に従事する子どもたちが大勢います。こうした子どもたちに経済的な支援ができない私たち庶民にとって、児童労働廃止のために何かを行うということに、少なからずためらいを感じるのではないかと思います。

しかし、私たちに出来ることがひとつあります。それは、子どもたちの人生に価値や自尊心を与えてあげることです。

この国の法律では、健康な子どもであれば16才になれば働くことが認められています。

しかし、現実には様々な家庭の事情から12才以下の子どもたちがインドではたくさん働いています。



ジョティー姉妹の教室に通う子どもたち

子どもたちが児童労働に従事せざるを得ない主な理由として：

1. 家庭の貧しさのために、子どもたちを働かせざるを得ないこと
2. 産児制限がなされていないため家族構成員の数がとても多いこと
3. 高い文盲率

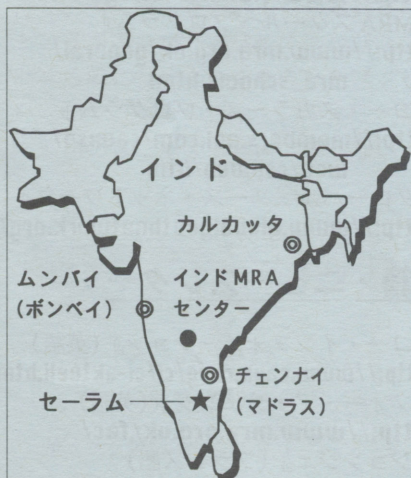
などが挙げられます。

子どもたちのための教育プロジェクト

現在タミルナド州政府は、こうした子どもたちの環境改善のために新しいプロジェクトを導入しています。このプロジェクトは1997～98年にかけて始まり、『児童労働廃止計画』と呼ばれています。このプロジェクトでは、NGO(非政府組織)や政府機関の協力によって、様々な労働に従事している子どもたちが、市内各所に設置された“トランジット・スクール”と呼ばれる場所へ送られます。また「トランジット・キャンプ」計画は、コミュニティーを基に、教育を通じて児童労働というものを改善していこうという試みです。このプロジェクトは、非公式な教育形態の特別クラスとして始まりましたが、ただ働くことしか知らなかった子どもたちが、色々なことを学べる生徒に変わるという役割をもたらすようになったのです。

こうした試みは、主にチェンナイ(マドラス)で行われているものですが、他の小規模な町や村でも、こうしたプロジェクトを必要としている所は数多いのです。

昨年、私と姉のヴィジェラキシミ(MRA専従)は、MRAの仕事をしてきたマハラシュトラ州のパンチガニーにあるアジアプラトー(インドMRAセンター)を離れ、活動の拠点を南インドに移すことにしました。そして、学校へ通えない子どもたちのための教育支援プロジェクトを、私たちの実家のある南インドのセーラムという町で始め



ました。南インドに活動の地を移した当初は、一体何から始めていけば良いのか分かりませんでした。しかし、学校と産業に関係した何らかのプログラムをやりたいと強く思っていました。今年4月に、チェンナイで子どもたちのためのキャンプを行い、ある学校でも教育プログラムを実施しました。そして、姉は6月に母の暮らすセーラムで学校へ通えない子どもたちを集めて小さな教室を始めました。最初は僅か15人の子どもたちでスタートしましたが、今では50人近くに増えました。殆どの子どもたちは、とても貧しい家庭の子どもたちです。何人かは幼い頃から働かざるを得ない環境の中で育ち、教育の機会を奪われてきた子どもたちでした。両親のいる子もいれば、いない子もいます。こうした子どもたちの生い立ちを知ることは、とても辛く悲しいことでした。

多くの人々が、私たちが児童労働を廃止させるために活動しているのかどうかを尋ねました。私は個人的には、児童労働を全面的に廃止することは出来ないと感じています。なぜなら、もし、私たちが子どもたちが働きに行くのを止めれば、その子どもの家族は直ちに経済的に困窮してしまうからです。私たちがしたいことは、様々な事情で教育の機会を失った子どもたちを集めて、学習の機会を少しでも与えてあげることによって、こうした子どもたちに新しい人生を与えてあげることなのです。子どもたちは、毎夕私たちのところを訪れ、2時間勉強していきます。その2時間の間に、子どもたちは、瞑想や静かになって自分自身について考える時間をもったり、お互いに話しあったりしています。また英語の勉強や物語を聞いたり、ゲーム等も楽しんだりしています。

目をみはらされる子どもたちの変化

私は今夏しばらくインドを離れ、3ヶ月ほど台湾と日本を訪問し、最近帰国したばかりですが、子どもたちが変わって行くのを目の当たりにしています。最初の頃は、子どもたちは許可を得ることなく物に手を伸ばしました。しかし、今は先ずそれを手にしても良いかどうかを尋ねる様になりました。子どもたちは心を開き、自分が思ったり感じたりしたことを他の人と話し合う様になりました。また、自分の中で誤りのある部分を認識し、それを改める様にもなりました。子どもたちが自分たちが住む場所について自分自身の考えを、心を開いて話し合っているのを聞いて本当に驚きました。子どもたちは自分たちが暮らしている地域のために、何をやればいいのか、全員がそれぞれに意見を持っていました。私は学校でのプロジェクトにも係わっているので、姉が始めた教室については、時間の許す範囲で協力をしてきました。私は学校の生徒たちに人生の経験についてエッセイを書かせるプログラムに係わっています。例えば、正直さや無私、そして規律等の体験について書いてもらうのです。去年は少なくとも50人の生徒がエッセイを書き、それが一冊の本になって出版されました。今年はまだ多くの学校に働きかけて、このプロジェクトを通して、他の国々の生徒たちともネットワークを作るつもりです。

今回、私は日本を去るにあたって、東京のMRAの女性の会の方々から、私たち姉妹の教育プロジェクトの為に、ご寄付を頂戴しました。こうした皆様方のサポートに大変感謝しております。今回頂いたご寄付は子どもたちの教材の為に役立てさせていただきます。皆様方のこうしたご支援は、この活動をこれからも一所懸命やって行かねばならないという思いを更に強めさせてくれます。この様なすべての経験に感謝しています。子どもたちと共に学び、子どもたちのために活動していくことは、私の創造性を高めてくれるのです。

スブラマニアン・プロジェクト

今年の夏、来日されていたインドのジョティー・スブラマニアンさんから、彼女がお姉さんと共に、実家のある南インドのセーラムで子どもたちのための教育プロジェクトをしている様子を聞き、とても感銘しました。姉妹で貯めた少ない資金で始めた教室のため、教材やゲーム等が十分に揃っていないと知り、それでは長期的に援助をしていこうと考え、まずは『ノートブック・プロジェクト』を始めました。片面を使っていない使用済みの紙と古いカレンダーを集めて手作りのノートを作っています。また、いらぬノートや玩具やゲーム、そしてぬいぐるみも集めてインドに送ります。今後、このプロジェクトを『スブラマニアン・プロジェクト』と名付け、長期的に手作りノートや物とお金を集めて支援をしていきたいと思えます。つきましては、このノート作りや物集め、そして募金のお手伝いをして下さる方々を募っています。ご関心のある方は、MRA事務局に電話かファックス、あるいはEメールでご連絡下さいませようお願いします。(マリアンネ和田)

カンボジアの子どもたちへ、 感謝を夢と希望に託して

兼松 恵（神戸在住）

カンボジアでの孤児院設立の知らせ

世界各地で震災や戦争によって、これまで人々が平和に暮らしていた街が破壊され、命からがら助かった人々のことをニュースなどで聞く度に阪神・淡路大震災のことを思い出します。この震災の恐怖から癒されるにはまだしばしの年数がかかりそうです。

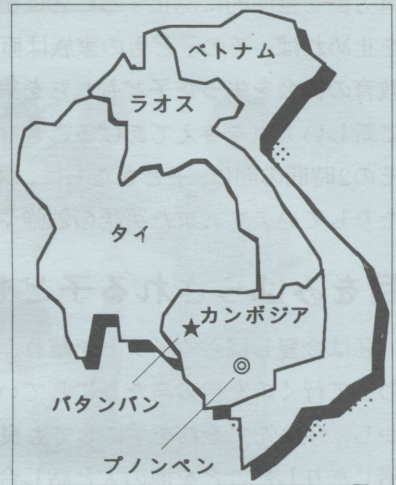
5年前、神戸復興の為、街全体がまるで工事現場と化し、壊れた街並みの中を子どもたちが仮設校舎で行われる授業に通い始めた頃、カンボジアのMRAの友人のソン・スベール氏（現憲法委員会委員）から孤児院設立の知らせが私のもとに届きました。神戸の友人にこのことについて話をし、震災で家を失ったものの、自分達の子どもが無事に元気で学校に通えていることの有り難さとその感謝の気持ちをカンボジアの子どもたちと分かち合いたいと、神戸のお母さん方の間でカンボジアの孤児達を支える会を発足させました。そしてプノンペン近くの『スレアンピルの平和の子どもたちの家』にわずかながら支援を始めました。

当時16名の子どもたちで開所されたこの孤児院には、1999年現在、幼児から高校生ままで121名の子どもたちが生活をし、大勢の方々に支えられながら学校にも通っています。今年は、日本の政府もいまだ支援の手を差し伸べていないタイ国境沿いのバタンバン州に、京都の石川洋先生はじめ”ありがとう愛の会”の皆さんの暖かいご支援のもと、多くの方々のご協力により第2の孤児院『オダンバンの平和の子どもの家』も設立されました。まだ建設途中であるにもかかわらず既に21名のストリートチルドレンのかけ込み寺となっています。

今年の8月末、スイスのコー（CAUX）で開催されたコーMRA世界大会に参加した帰りに、カンボジアに立ち寄り「オダンバンの平和の子どもの家」を訪れました。いまだベッドどころか、毛布も窓の木戸も出入口のドアも何もない家でしたが、トイレと井戸が一つ（生活の為に水を確保する命綱です）、そして薪でご飯を炊く台所である小さな小屋がありました。私も子どもたちと一緒にここに一晚泊めていただきました。東京のMRA女性の会からも心暖

まるご支援を頂き、バタンバンの子どもたちの毛布と蚊帳を30枚ずつ購入し寄贈できた事は何よりの喜びでした。心より皆様の暖かいお気持ちに対してお礼申し上げます。

プノンペンからバタンバンの孤児院に同行して下さった方は、75才になられる元教育学教授のサム・オーウェン女史で、ポルポト政権時代にご主人と5人の子供を殺された方でした。またソン・スベール氏の小



「オダンバンの平和の子どもの家」子どもたち

学生の時の先生だったということです。想像を絶するつらい時代を生き延び深い悲しみの日々を送っていたオーウェン女史は、海外で亡命生活を強いられていた教え子のソン・スベール氏が帰国し、当時政界での責任を担いながらもストリートチルドレンの世話を始めた彼の生き様に強く励まされ、悲しみに打ちひしがれてばかりの人生ではなく、カンボジアの明日を担う子供たちの為に自分にもまだまだ役割があると決意されたそうです。例え



サム・オーウェン女史（左から3番目）と兼松恵さん（右から2番目）

どんなに深い悲しみの中に突然つき落とされたとしても、明日に向かって、次ぎの世代の為に自分にもでき

る事があると教えてくれたのがかつての教え子であったソン・スベール氏であったとのこと。「今は彼が私の生き方の先生です」とオーウェン女史が私に語って下さったのがとても印象的でした。また、オーウェン女史はポトポト政権時代からずっと持ち続けているという写真をそっと私に見せながら「これは私にとって、とても大切なものです」と話して下さいました。それは亡くなったご主人とお二人で一緒に写っている写真でした。

神戸からカンボジアへ、希望のパイプを繋げて

最近では1993年のカンボジア総選挙の頃に比べると、カンボジアのことがあまり日本のメディアで取りあげられませんが、カンボジアの人々の生活は今日でもいぜんとして非常に厳しい状況です。フノンペンの大通りには、ここ3、4年の間で随分と電灯がともる様になり街全体が明るくなりましたが、20年以上も続いた戦争の後、国を再建して行くにはまだまだ年月がかかりそうです。人々の栄養確保もままならず、結核患者も多いということです。基本的な食べる事や学校教育等の問題。そして人口の八割が農民ですが、戦禍で荒廃した農地を再び開こうしていくのも、まだまだ全てこれからという状況です。また地雷除去を初めエイズ患者（母子感染も含めて）、ストリートチルドレン、臓器売買、雇用問題等など…。これまで70年代からつい最近まで内戦の中で生き延びるだけで精一杯であった人々にとって、生活の立て直しを図るには、まだまだ時間もかかり、世界からの援助も必要としています。NGO（非政府機関）も世界中から、また日本からも幾つかの団体が援助の手を差し伸べていますが、それぞれ、いろいろな問題も抱えている様です。必要なものが必要としている人々の手に届くという確かなパイプがある所から、まず応援していくしかないと思います。子どもたちの全てが、少なくとも日々の食べ物を得、学校教育を受けられ自立できるような国にカンボジアが再建されていくことを祈りながら、これからも神戸から希望のパイプを例え細くとも長く繋いでいきたいと願ってやみません。

■第22回関西秋季大会レポート

今夏もスイスのコー（CAUX）・マウンテンハウスでコーMFA世界大会が開催され、人種、宗教、職業、地位、性別などすべてにこだわることなく、世界中から21世紀に向けてより良い世界を築こうと考える人々が大勢集いました。“このコー世界大会での素晴らしい体験を関西で”との想いのもとに関西秋季大会が始まり、今年で22回目を迎えました。

今年の関西秋季大会は、秋晴れの10月16、17日の両日、大阪南港コスモスクエア国際交流センターにおいて開催され、「心のわだかまりを捨てて～新たな出発への誓い～自分モードから世界モードへの変革」を総合テーマに、堀本崇（七五三基金代表）、ジョティー・スプラマニアン（インドMFA専従）、マイケル・フォエルケル（MFA研

修生）の3氏をゲストに迎え、関東、岡山、九州など各地から32名が集い、積極的に意見交換を行いました。

この会議では『自分の在り方と社会のモラル』『家庭のしつけと教育』『国際交流と貢献について』の3つの分科会が設けられましたが、それぞれ、今、重要性を増しているテーマだけに活発な議論が展開されました。日頃から様々な分野でボランティア活動や社会問題の解決に取り組む参加者からは、その活動から得られた情報や問題提起等も出され、新しい観点からそれぞれが抱える問題点への認識を深めあいました。また全体会議の時間に、親子の間の理解を深めたという話は多くの参加者の感動を誘いました。2日間という短い会議でしたが、来年もまたこの場所での再会を誓い、それぞれが会場を後にしました。（関西世話人会）

◆ヤング・ヒールズ・スタディー・グループ (YPSG) レポート

(報告者：高橋千恵、田口圭祐)

■ 11月6日(土)に行われた第3回のYPSGは、ポーランド生まれのオーストラリア人、マイケル・フォエルケルさんを囲んで行われた。民衆の自由化要求が高まっていた80年代のポーランドでは戒厳令がしかれ、暴動のさなかに警官によって投げつけられた催眠ガスの缶で足にケガをしたことや、今ではコンピューターのエンジニアとなったマイケルさんも、10年前にオーストラリアに移住したときは、英語力不足で苦労した話などを聞き、出席者は彼の2つの祖国に思いをさせた。「2つの祖国のどんな点にプライドを感じるか」という参加者の質問に、マイケルさんが「どんなヨーロッパの列強に虐げられても、その度に蘇ったポーランド人の不屈の精神には敬意を表すが、プライドはいさかひの原因になるので、好ましくない」と答えたため、日本人参加者は英語でいう「プライド」と日本人がしばしば肯定的な意味で使う「誇り」という言葉が、必ずしも一致しないことに気づいた。逆にマイケルさんが、日本のどんなところにプライドを覚えるかとみんなに尋ねると、伝統文化や最近のファッションにも話がおよび、白熱した議論へと展開していった。今回も外国に関する知識を増やし、英語力を高めるのみならず、日本を改めて見つめ直すチャンスを与えてくれた会だった。(高橋千恵)

■ 12月4日、ベンジャミン・マーキン駐日ボスニア・ヘルツェゴビナ大使をお迎えし、4回目のYPSGが行なわれた。西暦600年のスラブ人移民から始まり、東西ローマ帝国、オスマントルコ、オーストリアの支配から両世界大戦を経て、先の内



YPSGの参加者たち

戦までバルカン半島が常に勢力争いの最前線だった歴史から、80万人の難民、地雷、破壊された都市の再建といった現在抱える課題まで教えて頂いた。「人は歴史から学ばなければいけない。そして先の内戦を最後にしなければ・・・」この言葉が今までの誰の言葉よりも重く感じられた。(田口圭祐)

事務局便り

◇ 去る9月16日、カナダ大使館にて開催された日加外交関係樹立70周年記念式典に相馬雪香会長が招かれ、日加両国の世界平和と人道援助促進に多大なる貢献をしたとして、カナダのジャン・クレティエン首相より表彰状が手渡されました。また第6回読売国際協力賞が「難民を助ける会」に決まり、10月5日付の読売新聞朝刊に、同協会会長でもある相馬雪香会長の受賞記事が掲載されました。

◇ 今年も残すところ後わずかとなりました。本年も皆様のご支援ご協力にお礼を申し上げます。来年は別紙のご案内にもありますように、更にMRA活動の内容充実を図るため、月例会を初めとして、バラエティーに富ませた様々な会合を予定しております。会員の皆様方のご参加をお待ちしております。またご意見やご提案などございましたら、どしどし事務局までお寄せ下さい。来る2000年が皆様にとって素晴らしい年になることを事務局一同願っております。来年もどうぞ宜しくお願いいたします。

■ 諸委員会紹介

この度、国際MRA日本協会では、MRAの活動をより充実したものにするために、「月例会企画委員会」と「第23回小田原MRA国際会議準備委員会」、そして「IMAJニュース編集委員会」を発足させました。それぞれの委員会のメンバーをご紹介します。

● 「月例会企画委員会」

太田敦之、小宮綾子、吉田尊子、長野清志、マリアンネ和田

● 「第23回小田原MRA国際会議準備委員会」

榊たか子、相馬雪香、高柳静江、中島秀夫、長野清志、中山啓介、二宮秀夫、吉田尊子、アドリエンネ和田、マリアンネ和田

● 「IMAJニュース編集委員会」

柏原征則、相馬雪香、マリアンネ和田

尚、それぞれの委員会
に参加ご希望の方は、
事務局へご連絡下さい。
皆様のご支援ご協力を
ぜひお願いいたします。